

研究課題	在外教育施設における非認知能力の育成を目指した現地校との交流実践
副題	～ICT 機器を活用した互いの文化発信と、Web による継続的な交流を通して～
キーワード	在外教育施設 非認知能力 現地校との交流 SNS
学校/団体 名	私立ロッテルダム日本人学校
所在地	〒3055WJ Verhulstlaan 19, Rotterdam, Netherlands
ホームページ	https://jsrotte.nl/

1. 研究の背景

ロッテルダム日本人学校は、小・中学部の児童生徒合わせて 20 名前後の小規模校である。そのため、多様な人間関係の構築や、活発な意見交換、協働的な学習を進めることに課題がある。また、言葉や環境の違いがあることから在留邦人のコミュニティに依存しがちになり、社会的な広がりを持たせることにも難しさがある。これらの教育課題の解決のために、一昨年度はパナソニック教育財団の研究助成を受け、協働学習の実践として、映像やプレゼンテーション制作による日本文化・オランダ文化を発信する取り組みを行った。そして昨年度もパナソニック教育財団の研究助成に採択され、教科学習の中でもより多くの考え方に触れ、伝える相手を意識した意見交換を促すために、他の小規模在外教育施設との遠隔合同授業を実施し、一定の成果を挙げることができた。

これらの実践を礎として、今年度は現地校との交流を活発化していきたいと考えた。本校は、これまでも現地校との交流を行っているが、日本文化について調べたことの発表や日本の昔遊びの説明などの行事による交流が主な活動であった。そこで、定期的な授業交流や、ICT 機器を活用した WEB での共同授業を実施することで、現地校の子どもたちとの主体的・協働的な学びを促し、人間関係の広がり・社会的な広がりを持たせることに繋がると考え、本研究計画を立案した。

2. 研究の目的

本研究の教育活動的な側面からの目的は、本実践研究において現地校と交流することで、非認知能力を育成し、人間関係の広がり・社会的な広がりを促進することである。非認知能力は「社会的情動スキル」と位置づけられ、①目標の達成、②他者との協働、③情動の制御の 3 つの要素を軸としている (OECD, 2015)。非認知能力を育成していくために、直接的な対面交流、WEB アプリケーションを活用したオンラインでの協働等の教育活動を行う。これらの実践をすすめる中で、児童生徒のコミュニケーション能力の向上、ICT 活用技術の向上、相手を意識した伝える力の向上をめざすことを目的とする。そして、これから国籍や人種・民族など、多様な人々とかかわる社会の中で、児童生徒たち自身が自分で考えて行動し、協力・協働し合うことのできるグローバル人材を育てることに繋げていきたい。

研究的な側面からの目的は、これからの在外教育施設における現地校との交流のあり方についての示唆を得ることである。これまでの現地校との交流や、日本の学校との交流の実践においては、調べたことを発表し合ったり、お互いの文化を体験したりするなど、単発での交流やその場限りの活動になってしまうことがあった。そこで、本実践研究においては、非認知能力の育成という視点を持って現地校との継続的な交流授業を行うことで、実践したことが非認知能力のどのような要素を育てていくことに繋がるのか、整理をしていく。ただ交流することを目的とするのではなく、多様な人々とともに目標に向けて協力していく実践となるようにすることで、非認知能力の育成に繋がる在外教育施設の交流のモデルケースとしていきたい。

3. 研究の経過

小学部は、以前より本校と交流活動を行ってきた、近隣の小学校「Hildegaschool Rotterdam」との間で、プロジェクト学習をすすめてきた。中学部は、現地の高校「Taylingen College」と、Leidenにある中学校「Bonaventura Agora」との間で、対面とオンラインを組み合わせた交流活動を行った。

(1) 取組内容・方法

時期	取り組み内容・方法、実践の評価
4月	職員会議で今年度の研究の共通理解を図る。 研究テーマ、研究組織、研究方法、研究計画
5月	校内職員研修① 本校で育てたい非認知能力についての検討・共有、Webによる協働的な学びを促ためのプラットフォームや教材についての研修
5月 3月	現地校との交流活動 ・ Hildegaschool Rotterdam とのプロジェクト学習 Hildegaschool Rotterdam の児童と、本校の児童が合同チームを作り、それぞれのチームで調べたい国を1つ決める。そして、調べてまとめたものを英語で発表する。 ・ Bonaventura Agora との交流学习 互いの学校の紹介や、現地校の生徒に本校の授業を体験してもらう。 Web 掲示板ツール「Padlet」を用いて、オンラインでの交流活動を継続する。 ・ Taylingen College との交流学习 互いの学校紹介や、本校中学部生徒が日本文化について紹介する。 ・ 日本文化紹介 本校の行事「日本文化紹介」に、Hildegaschool Rotterdam、および本校に隣接する Nord Anglia International School Rotterdam の児童を招待し、全校児童生徒が和太鼓ワークショップを実施する。
6・7月	オランダの教育制度に関する研修会 オランダ国内で現地小学校講師やコーディネーターをされている、Eduble の三島菜央先生を迎え、オランダの教育制度や現地校の様子などについて共有

9・10 月	本校の教育活動の評価に関する研究会 プロジェクト研究員の大船ちさと先生を迎え、本校が取り組んできた現地校交流等の取り組みについて、評価方法や研究成果の発信についての意見交換
1月	研究成果の確認と評価
2・3月	本校の児童生徒への非認知能力の自己評価についてのアンケート調査 研究報告書の作成 次年度の研究計画立案

(2) 本校で育てたい非認知能力の共有

非認知能力には様々な力の総称であるため、非常に多岐にわたる。そのため、本校の児童生徒に育てていきたい力は何か、具体化する必要があった。国立政策研究所（2024）は、非認知能力がカバーする幅広い内容の中でも特に、児童生徒の生活や発達に重要である「社会情緒的能力」についてまとめている。これは、自己意識やセルフコントロール、自己効力感などの「自分に関する領域」と、他者の感情・意図・信念の理解や、他者の視点や立場の理解などの「他者に関する領域」、共感性やコミュニケーションなどの「自分と他者や集団との関係に関する領域」の3つの能力としている。本校ではこの社会情緒的能力の中でも特に、自分に関する領域の「自らを高める力」と、他者に関する領域の「他の人とつながる力」が必要であると考え、この2つの力に焦点を当てて実践を行うことを共有した。

本校で育てたい非認知能力

自らを 高める 力	1 例えば難しいことがあっても、あきらめずにもう一回と思える 2 新しいことに積極的に挑戦できる 3 目標を達成した時に、「嬉しさや気持ち良さ」を感じる 4 何かに取り組んでいるときに「楽しい」と感じられる 5 反省し改善するために日々のふり返りができる
他の 人と つなが る力	6 初対面の人や自分と合いにくい人とも上手く付き合える 7 礼儀やマナー、ルールを意識しながら行動できる 8 相手の性格や考え方を理解しながら行動できる 9 いま、相手が何を思っているのか理解しようとする 10 集団の中で自分の役割を自覚しながら行動できる

(3) オランダの教育についての理解

オランダの現地小学校講師や日本国内の先生方にオランダの現地校の紹介を行っている、Edubleの三島菜央先生を迎え、オランダの教育制度や現地校の教育内容についての理解を深める研修を実施した。また、協力校との渉外や交流活動の推進のためのコーディネートを行っていた。

(4) 交流活動の評価に関する研修

プロジェクト研究員の大船ちさと先生を迎え、本研究実践の評価と研究成果の発信についての研修を行った。特に、本校がこれまでに取り組んできた交流実践が非認知能力の育成にどのように繋がっていくのか議論し、研究の評価の参考とした。

(5) 交流活動の実施

実施時期	学年	相手校	内容
5月13日 6月24日 6月25日 7月2日	小学部	Hildegaschool Rotterdam	・自己紹介 ・相手校の児童と本校の児童がチームを作り、決めた国についての調べ学習 ・Google スライドを用いて、互いの学校同士が協力して Web 上でプレゼンテーションを作成 ・英語でのプレゼンテーションの発表会
7月1日～	小学部 6年生 中学部	Bonaventura Agora	・ Bonaventura Agora の生徒が本校に来校 ・自己紹介 ・互いの学校紹介 ・本校の英語、道徳、書写の授業体験 ・ Padlet を用いて、Web 上での継続した交流
9月2日	中学部	Taylingen College	・自己紹介 ・互いの学校紹介 ・日本の文化紹介 ・太鼓活動の紹介
1月29日 2月4日	全校	Hildegaschool Rotterdam Nord Anglia International School Rotterdam	・本校の児童生徒の和太鼓演奏 ・和太鼓のワークショップ ・互いの学校が交流し合うレクリエーションの実施
3月4日	全校	Hildegaschool Rotterdam	・現地校の児童に本校の児童生徒が招待され、一緒に遊びや工作活動等を行った

4. 代表的な実践

実践① Hildegaschool Rotterdam と本校小学部とのプロジェクト学習

【実践概要】

本校小学部児童と、Hildegaschool Rotterdam の Grade 6 の児童がチームになって、一緒に1つの国についての調べ学習を行った。言語、宗教、衣服、食事、祭り・イベント、学校の6つのトピックについて調べ、プレゼンテーションを作成するプロジェクト学習である。4回の対面での学習と、それぞれの学校で Google スライドを用いた資料作成を行った。最後の学習回では、作成したプレゼンテーションの発表会を行い、それぞれのグループが英語で発表した。



【学習過程】

お互いの母国語が違っても、英語を共通言語としてグループの友だちとコミュニケーションを取りながら学習をすすめることができた。うまく伝わらないときには、単語やジェスチャーで伝えたり、翻訳機を使ったりして、相手に考えを伝えようと頑張る姿がみられた。

英語での発表が一番大きな壁であり、児童たちに聞いても「英語での発表が心配、不安。」と言っていた。そこで、中学生にも協力してもらい、発表原稿を作ったり、発表練習を聞いてもらったりするなどして、当日の発表に向けて取り組んだ。

Hildegaschool Rotterdam の先生も、自分のクラスの子どもたちがこんなにも英語で発表できるとは思っていなかったと驚いていた。



実践② Bonaventura Agora と本校小学部 6 年生・中学部との交流学习

【実践概要】

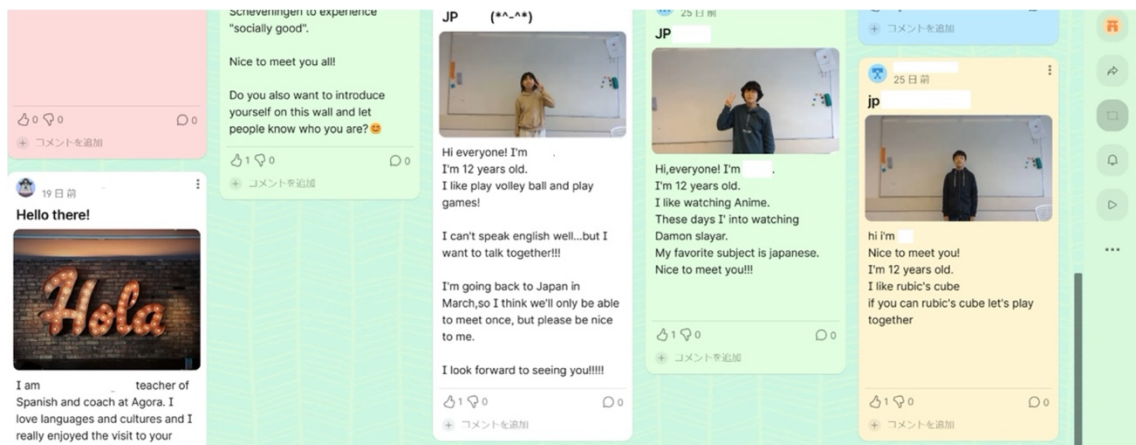
本校に Bonaventura Agora の生徒が来校し、日本の学校の授業を体験してもらう機会を設けた。また、来校した生徒からは、プロジェクト型学習を行っており、そのために必要な知識や技術を得るためのセッション（講義）があることなど、自分の学校の特色の紹介があった。このような交流を通じて、生徒たちが互いの学校を行き来したり、継続して交流し合ったりするきっかけ作りとした。

【学習過程】

実際に相手校の生徒が来てみると、本校の生徒は緊張して、英語が堪能な生徒でもどのように接したらよいのか戸惑っている様子が伺えた。しかし、日本文化（独楽・けん玉）を紹介する場面や書写の場面では、積極的に説明しようとしたり一緒に楽しもうとしたりする様子がたくさん見られた。そして、本校の生徒たちが同世代のオランダ人と交流することで、相手が使う流暢な英語に感化されたようである。「～を話してみたい」「もっと～してみたい」と学習意欲を高めている様子が見られたり、もっと英語を学ぶ必要があると実感したりしている様子で、英語実践の非常によい場となった。



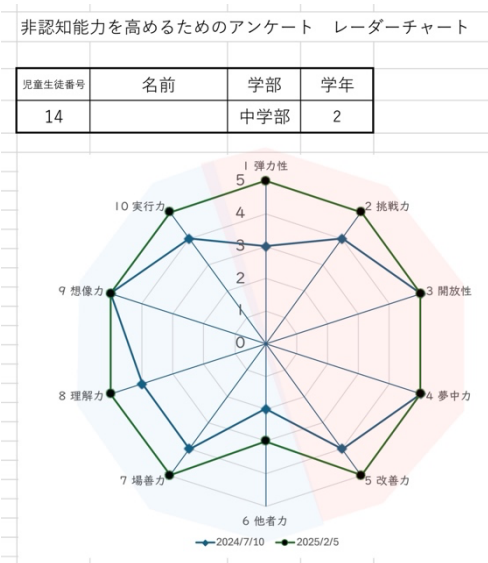
さらに、生徒たちは相手校の生徒と Instagram を交換し合い、本校に来校した後も継続して友だちとして繋がることができた。「相手の子がこんな所に行っていた」「今こんなことをしている」等という話を日常会話の中で教員に紹介することもあり、同世代のオランダ人の友だちができたことで、コミュニケーションを取る機会が広がった。このような繋がりができたことで、今度は相手校が本校の児童生徒を招待してくれて、訪問をする予定である。相手校の都合でこの研究実践期間中の訪問は叶わなかったが、現在は、Padlet による互いの児童生徒の継続したオンラインでの交流を行っているところである。



5. 研究の成果

(1) 児童生徒へのアンケート結果

今年度、児童生徒が交流活動を通して非認知能力がどのように変化したか評価するために、育てたい非認知能力についてのアンケートを作成した。アンケートは、教員間で共有した「自らを高める力」5項目と、「他の人とつながる力」の5項目について、5件法で自己評価を行うものとした。同様のアンケートを2回実施し、個人内で非認知能力についてどのような変化があったのかを分析した（1回目：2024年6月、2回目：2025年2月）。結果はレーダーチャートにして可視化し、それぞれの児童生徒の変化について教員間で討議した。



その結果、多くの児童生徒が1回目のアンケートよりも2回目のアンケートの結果が向上していた。特に、自らを高める力の「5. 反省し改善するための日々の振り返りができる」の項目や、他の人とつながる力の「8. 相手の性格や考え方を理解しながら行動できる」の項目の変化がみられた。交流活動を繰り返す中で、より良い活動にするにはどのようにすればよいか考えたり、相手校の児童生徒のことを考えて活動を計画したりすることができたため、高い評価につながったのではないかと思います。

一方で、1回目のアンケートでは自己評価が高かった生徒が、2回目のアンケートでは1回目よりも低い評価にしている結果もあった。この生徒は、交流学习のときにはとても頑張っている様子であり、実際に1年間交流学习をする中で、メタ認知能力が高まり、自分の得意不得意や改善したいことなど、自分のことをより理解できたのではないかと考えられる。

(2) 教員の評価

本校が育てたい非認知能力について、①どのような力が育まれたのか、②具体的な環境設定や手だて等手だて等の2点について、教員間で意見を出し合った。その結果を以下に示す。

①どのような力が育まれたのか	②具体的な環境設定や手だて等
・ 1 あきらめずに挑戦する力が高まった。 ・ 5 改善力→「次はこうしたい」という気持ちをもつことにつながった。 ・ 6 他者力、9 想像力→翻訳アプリなどを駆使し、なんとか話そうとする。相手のことをくみ取ってコミュニケーションを取りたい、相手を知りたいという気持ち。相手に興味をもつことにつながる。 ・ 程よい緊張感の中で、課題への真剣みが増した。	・ 大人が極力関わらないようにする。子どもたち同士で助け合いができる状況に、教師が計画を立てておく。 ・ 普段からグループ活動等の場を多く設定。 ・ 日本文化紹介、現地校交流で、児童生徒が自分たちで進行できるように会全体を設定した。 ・ 児童生徒たちが交流し合える機会を設定した。

教員間の評価においても、自らを高める力では「5. 反省し改善するための日々の振り返りができる」の項目が育まれたという意見が得られた。また、他の人と繋がる力では、「6. 初対面の人や自分と合いにくい人とも上手く付き合える」「9. いま、相手が何を思っているのか理解しようとする」の項目で、相手のことを知りたい、相手とコミュニケーションを取りたいという気持ちが育まれたという意見があった。

(3) 交流学习の成果

本実践では、単発の交流活動ではなく、プロジェクト学習を実施したり、SNS や掲示板アプリによるオンラインでの継続した交流を行ったりした。その結果、今までに無い視点で多くの成果を得ることができた。これまでの本校の交流活動は、先にも述べたように行事で日本の文化を紹介したり、太鼓を披露したりするなどの単発での活動となっていた。今年度は継続した交流学习を実施したことで、本校の児童生徒と協力校の児童生徒との関係性が深くなり、非認知能力の育成に焦点を当てた実践を行うことができた。

まず、相手校の児童生徒と一緒にプロジェクト学習を行うことで、目的意識をもち、学ぶ意欲を高めることができた。そして、お互い母国語が異なる中で、様々な方法を駆使してコミュニケーションを取り、相手のことをもっと知ろうとする姿をみることができた。このような様子は、本校が育てたい「自らを高める力」「他の人とつながる力」に繋がることが示唆された。

そして、対面の交流活動だけではなく、オンラインでの交流方法を模索できたことも、本実践の成果である。それぞれの学校の児童生徒という関係から、SNS や掲示板アプリで繋がり、同世代のオランダ人の友だちとして、コミュニケーションを取る機会を広げることができた。国籍や人種・民族など、多様な人々とかかわる社会の中で、このように現地の児童生徒と繋がる経験をするとは、児童生徒たち自身が自分で考えて行動し、協力・協働し合うことのできるグローバル人材の育成に繋げることができると思う。

6. 今後の課題・展望

今後は、これらの実践の成果を外部に発信し、他の在外教育施設で現地校と交流学习を実践する際の先行事例として紹介できるようにしていきたい。また、今後は短期での交換留学や、新たな学校との交流等もすすめていく計画である。本研究で得られた知見を生かし、現地校の子どもたちとの協働的な学びの機会を設けることで、児童生徒たちが多様な人々とともに目標に向けて協力し合う実践としていきたい。

7. おわりに

本実践を今年度だけで終わらせず、来年度以降も現地校と連携し、日常的な交流学习を続けていきたい。そして、児童生徒の「非認知能力の育成」へと繋げていきたいと考えている。

最後に、本実践をすすめるにあたり、このような機会をいただき、パナソニック教育財団の関係者の皆様に深くお礼申し上げます。

8. 参考文献

- ・ OECD (2015) Skills for Social Progress: the Power of Social and Emotional Skills , OECD Skills Studies, OECD Publishing, Paris, <http://dx.doi.org/10.1787/9789264226159-en> (2025 年 3 月 11 日閲覧) .
- ・ 国立教育政策研究所(2024) 社会情緒的（非認知）能力の発達と環境に関する研究—教育と学校改善への活用可能性の視点から—